

(川崎さん)

いう気持ちになりましたけど、結局また足の腫れが出てきましたし、これはどうにもならんなという感じでしたのですが、そうこうしているうちに、ライフサポートの方から「来てもいいです、よ。お迎えできますよ」という連絡を頂いたので、取るものも取りあえず、着の身着のまま、支援物資で頂いた、リハパンと体一つで穴水の方のライフサポートセンターに行きました。

行ったは良いが、施設の方も停電ですし、水道も水も出ないし、食糧も備蓄の食糧ということで、部屋に行くことができない。職員4名の方が車いすごとかついでもらって1階から2階へ連れて行ってくれました。

用意してくれた部屋で、足を伸ばして休むことができました。でも、ここと同じように電気も水もありませんから、職員もこちらと同様で、通常の勤務体制ではなく、非常時の何日間も、家に帰っていらっしやらない、職員の方もいらっしやいましたし、応援で急きよ来てくださったまま、そのまま居続ける職員の方もおられました。

そういうしているうちに、支援をいただける機会、というか主に東海地方からのボランティア、職員のボランティアの方々が、たくさん愛知県、静岡県、岐阜県、三重県あたりからの、これは協定がされているらしいのですが。

障害者支援施設の職員、主に生活支援員の方々がボランティアで応援に来て下さって、何とか、少しずつですが、通常の生活の形に戻るような雰囲気になったのは、そのボランティアの方が来て下さってからです。まだまだ、施設のガラスが割れたままだったりとか、トイレの配管がダメでうまく流れなかったりとか。食事がずっと非常食のままであったりとか、という状態は、ずっとずっと変わらなかったです。だいぶ長い間、変わらなかったと思います。

在宅であろうが、施設であろうが、地震になったら、みんなが当事者ですから、助けを求めるということは、なかなか自ら「助けて下さい」と言いにくいな、ということも今回、痛切に感じました。例えば、自宅からこういう状況になったので、誰か助けてというのも、個別避難計画等があっても、台帳の上では、名前が載っていて誰かが